

あるむぜお 40

府中市郷土の森だより

al museo NO. 40

1997年6月20日



園内歳時記

府中市郷土の森博物館は、1987年のオープン以来、満10歳の誕生日を迎え、新たなスタートを切ったところです。府中の歴史や民俗、考古、自然の資料・情報が集積された常設展示室を中心に、広大なフィールドに配置された復原建築物や、雑木林なども合わせた総合博物館として数々の事業を展開し、早10年！

本誌「あるむぜお」も、各種分野の話題をはじめ、豊富な事業紹介を掲載し続けて、ついに発行40号に至るまでに成長しました。今号よりA4版化に伴ったリニューアルをはかり、益々充実した内容で編集努力を重ねていく決意です。よりいっそうのご愛読をよろしくお願いいたします。

郷土の森の10年を真っ先に感じる風景は、けやき

並木ではないでしょうか。オープン当初はなかなか根付かず、新緑の頃になっても葉が一様に育たない状態であったものが、時の流れとともにその容姿を変貌させてきたのです。

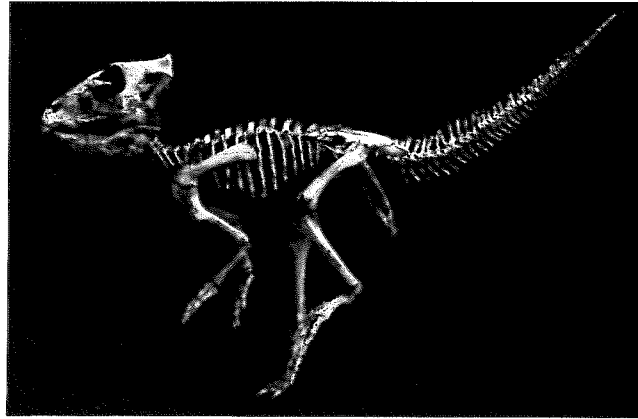
郷土の森のけやき並木は、国指定の天然記念物である府中駅前の馬場大門けやき並木に見立てて博物館本館前の通りを飾っています。天然記念物に指定されているけやきは日本全国で20以上ありますが、いずれも巨木である1本を指していています。並木として指定されているのは府中だけなのです。まさに府中のシンボルといっても過言ではないでしょう。本家本元のけやきには到底及ばないながらも、されど10年。青葉繁る季節に、園内のけやきも実に雄大な姿になってくれたものです。

特別展

シルクロード大恐竜展

7月19日(土)～8月31日(日)

郷土の森開設 10 周年を記念した特別展が今夏、開催されることになりました。郷土の森の 1 周年、5 周年と節目を飾り、公開ごとにまさにメモリアル・イヤーにふさわしい内容と迫力で、多くの来場者を沸かせたあの展示・・・そうです！ 5 年の歳月を経て、再び郷土の森に恐竜たちが甦るのです。



アーケオケラトプス・オオシマイ (新属・新種)

1992 年、及び 1993 年の両年にまたがり、中国大陸は新疆ウイグル自治区と甘肅省一帯で、恐竜化石発掘調査が実施されました。この調査は調査地域が古代交易の道、シルクロードに沿っていたため、「シルクロード恐竜調査」と名付けられました。調査は、中国科学院古脊椎動物古人類研究所の董枝明教授が中心となり、これに日本人調査隊が加わった編成で行われました。

調査地域は、甘肅省西北部、馬鬃山地域、新疆ウイグル自治区のトルファン盆地、ズンガル盆地と数カ所行われましたが、いずれも中生代白亜紀、あるいは中生代から新生代にかけての地層が露出した、いわば恐竜をはじめとする古生物の宝庫と考えられるポイントです。成果は予想どおり、体長 6～7 m のイグアノドン類、竜脚類、プシッタコサウルス、プロトケラトプス完全骨格などが発見され、特にトルファン盆地では巨大な竜脚類の背骨や、ほぼ完全な竜脚類の前肢が発掘されました。これらの恐竜化石標本が、北京の中国科学院古脊椎動物古人類研究所に運ばれ、クリーニングや復元作業が施されたうえで、今回の展示会で展示

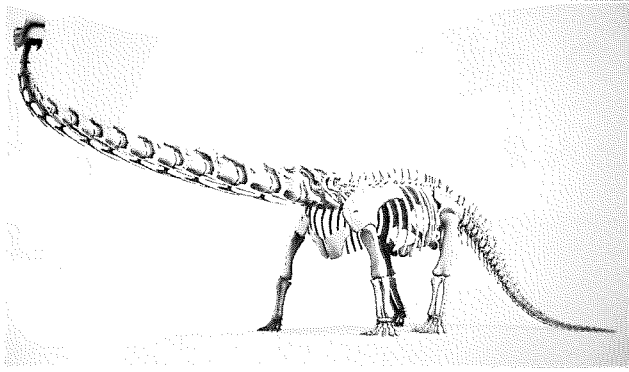
される運びとなったのです。

中国と日本の古生物学者が、一万余キロに及ぶ古代シルクロード一帯で発掘した成果は極めて豊富であり、化石重量が約 5 トン、しかも 6 種類の新属・新種が発見されるという内容でした。なかでもアーケオケラトプス・オオシマイは、代表的な発掘成果として注目を

浴びています。本種は全長 0.9m の小型の原始的角竜、これまで知られている新角竜類の中では最も古いもので、角竜類の起源を研究する上で最重要と考えられます。従来、角竜類の起源は中央アジアにあり、プシッタコサウルスが直接の祖先であるとされてきました。

アーケオケラトプス・オオシマイは、その頭骨の前に鳥のような尖った嘴を持ち、頭の両側に一對の丸く大きな眼窩があります。その歯は実に特徴的で、上顎の歯はプロトケラトプス型であり、下顎の歯は鳥脚類型の形状をなします。角竜類の祖先と考えられてきたプシッタコサウルスには、前顎骨には歯が存在せず、指の数も減少しています。しかし、アーケオケラトプスの前顎骨には歯があり、指の数も揃っています。従ってこのアーケオケラトプスこそ角竜の起源であり、プシッタコサウルスは角竜の兄弟的關係ではないかと推察される結果を導いたのです。

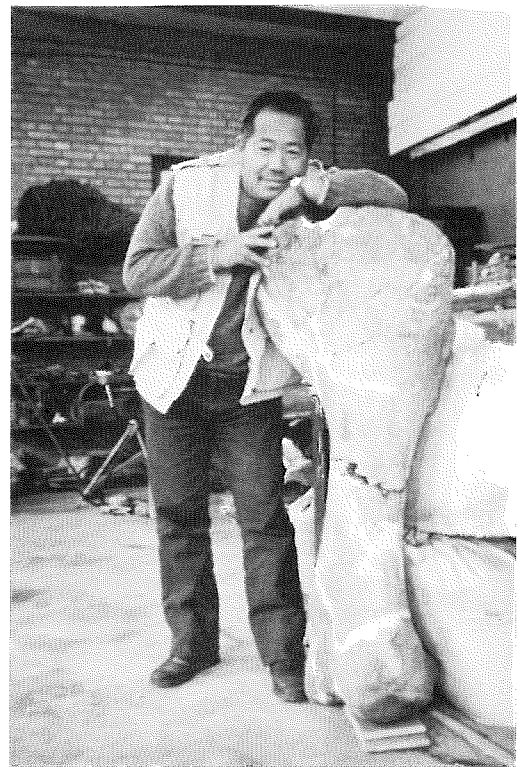
さて、偉大な成果を納めたシルクロードの恐竜発掘の数々は、ここでは紹介しきれない程のボリュームで



マメンチサウルス

展開されますが、今回の調査結果以外にも様々なシルクロードの恐竜がやってきます。全長22mにも及ぶマメンチサウルスの仲間、ダチョウ型恐竜のアーケオルニトミムスの仲間、肉食恐竜モノロフォサウルスの仲間など、あたかもそこに存在するかのごとく迫力十分の全身骨格が皆さんを驚かせてくれることでしょう。幾多の恐竜化石が教えてくれる、壮大な地球歴史の一端をこの機会に学習してほしいと思います。

夏休みのひととき、太古のロマンを求めて恐竜ウォッチングとしゃれこんでみては？ (中村 武史)



竜脚類の前肢

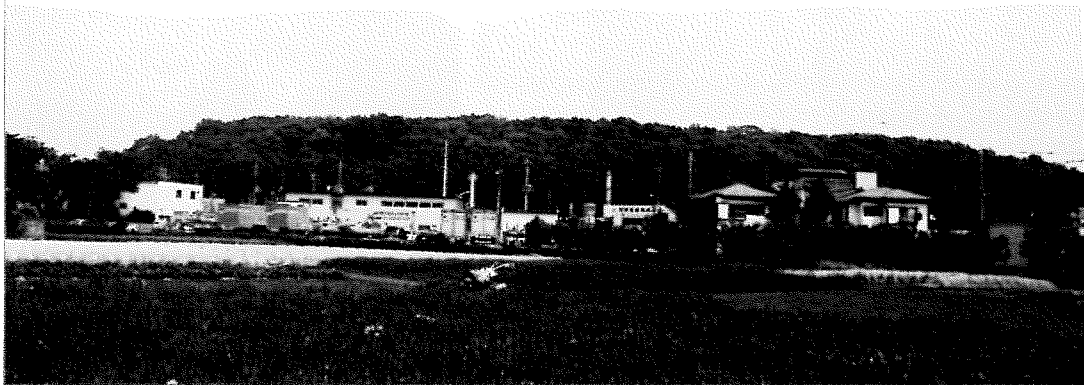
地球は恐竜惑星！？

恐竜は約2億2000万年前、中生代三畳紀中頃の地球に姿を現しました。その後ジュラ紀に爆発的進化を遂げ、多くの種が分化し、多様性に富んだ一大グループへと発展しました。まさに過去の地球は恐竜(が君臨する)惑星だったのです。

今回の展示のように恐竜を題材にしたものは、映像・書籍を含めて後を断ちません。恐竜が人々を引き付けるのは、その巨大さのためだけでなく、理由不明な突起物や装飾品をつけたユニークな容姿にも要素があると考えていいでしょう。そして何よりも、およそ6500万年前に突如として絶滅してしまった謎深い部分にこそ、関心が集まっているのです。世界中で数多くの発掘調査や研究が進められ、より明らかな恐竜像が浮かび上がってきていますが、一説には巨大彗星の地球衝突が恐竜絶滅の根拠という考え方もあります。彗星は、太古の地球に宇宙から生命の源を運んできたともいわれ、その彗星が逆に地球上の大きな生命群を消滅させたとは何とも皮肉な話ではありませんか。

今夏、恐竜展とともに公開されるプラネタリウム新番組、「ディノプラネット」では、恐竜と彗星の関係をテーマにファンタジックな内容が展開していきます。恐竜惑星“地球”には本当に巨大彗星が衝突したのでしょうか？

中世の府中と人見山



現在の府中の浅間山

▼ 取り残された山

黒井千次の小説『たまらん坂－武蔵野短篇集』(福武文庫)の一篇「せんげん山」の舞台は、府中市にある浅間山せんげんやまです。人妻久美子のマンションでとんだ醜態しゆうたいを演じた辰造は、直後のやるせない気分でのこの山の中を彷徨ほうこうします。山の由来を説明する看板に目を通した辰造は…、

なんのことはない、これは古墳どころか、平地から飛び出した山でさえなかったのだ。地形の知識に乏しい彼も、多摩川の対岸が横に連なる小高い丘陵であることくらいは識っていた。としたら、その高さにあったまわりの土地が押し流された結果、これは無理やりに作り出された引き算の山だったことになる。どうしてお前も一緒に流れていかなかったのか。「バカな山だなあ……。」辰造はくらは祠ほくらのまわりに露出している土を靴先で蹴った。行け、ほら、今からでもいいから、多摩川へ行け。山はびくとも動かなかった。

府中の浅間山は標高が80メートルで、周囲と比較した高さは30メートルにすぎませんが、何せ武蔵野台地(かつての「武蔵野の原野」)の唯一の山なのでよく目立ちます。しかも、関東ローム層に覆われた台地上にあって、この山だけは多摩丘陵と同じ土質からできているので、古くから得えたい体の知れない山だと思われてきました。江戸時代の地誌などを見ますと、「人見山」として紹介され、村人がよそから土を運んで造ったに違ちがいない、古代の国造の墓かも知れない、と書かれています。もっとも、古墳だとすれば国内最大の「仁徳陵」古墳にさらに土を高く盛ったくらいの大さになってしまいます。今日わかっていることは、何万年も昔にそのあたりを流れていた「古多摩川」が、まわ

りを削けずって残していった山がこの浅間山であることです。なぜ、ここだけ取り残されたかは、依然、謎ですが…。

▼ 2つの浅間山・人見山

しかし、ここで取り上げたいのは浅間山をめぐるもうひとつの謎です。府中の浅間山の別名は人見山。山頂せんげんじんじやまに浅間神社を祀るようになって浅間山と呼ばれるようになったのでしょうか。麓には人見村(現・若松町3・4丁目)が広がっていました。人見山＝浅間山と人見の集落、実はこれと同じ組合せが、埼玉県深谷市ふかやにもあります。深谷の浅間山の別名も人見山で、現在は仙元山公園と言って桜の名所になっています。山の高さ、大きさ、雰囲気までよく似ています。まわりの人見という地名も古くからのもので、貞治2年(1363)の古文書に「榛沢郡人見郷」と出てきます。この地は、源平合戦や南北朝内乱期に活躍する武蔵武士で、武蔵七党の猪俣党に属する人見氏の本拠地でした。『太平記』には、一族の人見四郎入道おんあ阿父子が、楠木正成の守る赤坂城攻めで壮絶な戦死を遂げる話があります。その人見四郎の墓が近くの一乗寺にあります。

ところが、府中の人見山にも近年まで人見四郎の墓があったと言われるのです。元徳2年(1330)には「多東郡住人見四郎入道光行」と書いた記録もあるので、榛沢郡(現・深谷市)だけに人見氏がいたわけではないようです。多東郡というのは、多摩郡を東西に分けた呼称で、多摩川の東側(左岸)を指し、府中もその範囲に属します。これと符号するように、府中の人見には中世の人見氏の屋敷があったとする伝承が、近世の地誌には見られます。さらに、両方の人見周辺の「人見原」

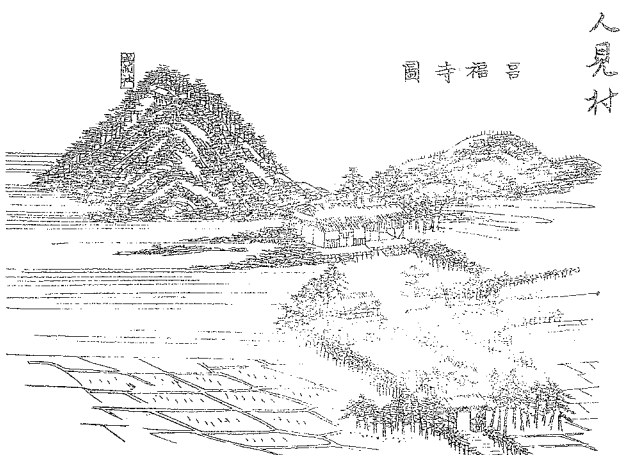
で合戦が行なわれていることまで一致しているのです。府中の人見原では正平7年(1352)に新田義興・義宗と足利尊氏が、深谷の人見原では康正2年(1456)に庁鼻和上杉氏と足利成氏がそれぞれ戦っています。

▼人見氏の移住

つまり、同じ武蔵国の多摩郡(府中)と榛沢郡(深谷)に人見という地があり、どちらにも浅間神社を祀る人見山という似たような小高い丘があり、両者とも中世の人見氏と縁があり、合戦が起きるほどに重要な場所であったということが出来ます。このような人見山をめぐる奇妙な一致をどう解釈すればいいのでしょうか。府中の浅間山自然保護会顧問の吉野正二氏は「人見四郎墓跡についての調査」という文のなかで、次のような興味深い説を述べています。

人見一族は、埼玉の人見村に発祥し、分家分派し、その内人見四郎一家は数代前に、臣従している北条氏が武蔵国司として府中に拠っているの、その近くで、地形が似ているこの地を求めて住みつき、集落をつくり、人見村を成し(中略)本家の地にならい、近くの山に浅間神社を祀り、守り神としたものと思はれる。

近年の中世都市の研究では、有力な在地領主層が在庁官人として国衙に結集し、国衙周辺に在庁官人居館群が形成されていた様子が明らかにされています。人見氏の場合も本貫地の深谷とは別に武蔵国衙のある府中に館を構えた可能性はあります。人見氏は時宗の信者として知られ、本拠地には菩提寺の時宗寺院一乗寺(一乗道場)がありますが、府中にも時宗の国府道場(現・長福寺)が同じ頃に設けられました。府中の人見はこの人見氏に因んで名付けられたということはないとは言えません。ただ、府中の人見山にそんな早い時期に浅間神社が祀られたかどうかはわかりません。深谷の浅間神社も室町時代の上杉氏の勧請と伝えられているからです。ともあれ、二つの人見と人見山は、中世の人見氏を通じて何らかつながりはあるようです。



深谷の浅間山(『武蔵名所図』国会図書館蔵より)

▼人の見る山・人を見る山

ところが、もう少し慎重に考える余地もあります。人見山の「人見」の語は、いうまでもなく「人が見る」「人を見る」の意味で、地域の住人や旅人が見たり、目印にする、あるいは山から特定の景観や現象を見るためのものと解釈できそうです。人見山という名の山は全国にたくさんあるはずで、きちんと調べなくてはなりません。たとえば千葉県君津市にもあります。吉田東伍の『大日本地名辞書』などを見ますと、小さい峰で高くはないが、海にも近くて目立つので、航海の目標ともなりこの名が付いた、という意味のことが書かれています。どうも人見山というのは、このような人々の目に留まる小高い丘のことで、地元で自ずと呼ばれるようになった名前であるような気がします。人見氏が移住してきて山の名前も人見山にしてしまったというのはちょっとうそっぽい感じです。

府中の人見山は、やはり府中という古代国府以来の都市の景観や機能、住人との関係でいつしか呼ばれるようになった山の名前ではないでしょうか。江戸時代後期のものですが、府中の景観を立体的に描いた「武蔵府中国府台勝概一覽図」が人見山の方角からの視点を採っていることも注意すべきでしょう。また、府中の分倍河原合戦の際に新田義貞側が敵陣を望んだという伝えの「人見塚」(人見山か)の話が、近世の紀行文『武野遊草』に紹介されていますが、伝承とは言えこの山の性格を示しているように思います。

以上のように考えていくとどうということになるでしょうか。深谷の人見氏が国衙付近に住んだ可能性は高いですから、人見氏は府中においても人見という地を選んで館を構えたのか。それとも、人見氏宅は少し違う場所にあり、人見氏の屋敷跡の伝承は地名に引かれて後世に作られたものなののでしょうか。人見氏にも取り残された浅間山は、その辺の事情を容易には語ってくれないようです。

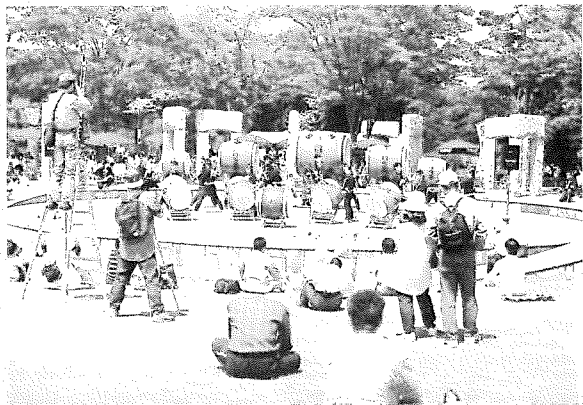
身を寄せ合う木立の隙間から辛うじて幾つかの高い建物の姿が遙かに望めたが、どれが久美子の住むマンションであるか、見分けることは出来なかった。「バカな山だよ、お前はー。」もう一度そう呟いてから辰造は浅間山を下り始めた。(「せんげん山」)

がめらと〜きんぐ

今年の連休は、結構飛び石になっていて、旅行に出掛けるには、幾分中途半端な日程になりがちのせいか、単発の行楽を楽しむ家族が多かったようです。お陰さまで雨の日を除けば、郷土の森は単発行楽に最適(?)なのか、大変盛況だったようです。

特に毎年恒例の「武蔵国府太鼓演奏会」(4月29日)は、恐らく過去最高の集まりを記録したのではないのでしょうか。まさに五月晴れと言っていい好天にも恵まれ、加えて朝から気温も上がりっぱなしの夏モード。水遊びの池にも大勢のちびっ子が、肌もふやけるほど長時間にわたり、はしゃいでいました。

1982年の創作以来、色々な場所で演奏されてきた武蔵国府太鼓。それぞれがオリジナルの



曲で構成されており、特にクライマックスの“分倍河原合戦太鼓”に突入すると、怒濤の響きが郷土の森の周辺地域にまで及んだそうです。

今回の演奏は、武蔵国府太鼓連盟の翔駒会が協力してくれたのですが、終了後に代表から「いやあ、今日はやって気持ちよかったねえ、またやらせてくださいよ」との言葉ももらった時は、かなりうれしかったことを記憶しています。さらに、「今日は子供さんも多かったんで、大きくなったら自分もこの太鼓をたたいてみたいなと思ってもらえるように、意識して頑張ったんだよ」の一言が、郷土芸能(文化)継承を願う当事者の声に思え、博物館でこうした催しを行う意義が、おぼろげながら形になったような気がしました。

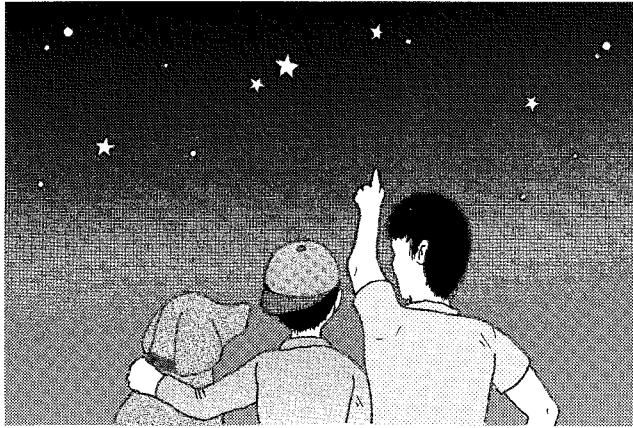
はしらのき〜ず〜はあととしの♪♪♪
今の子供たちは、せいくらべってするのかな？
きれいな家の柱に、傷なんかつけちゃうと、
お母さんにおこられちゃうんじゃないのかな？
昔ながらの子供の日を体験できるのは、
やっぱりこんな場所くらいしかないんじゃないのかな？
博物館で本当にありがたいところなんだなあ〜！

これまた毎年恒例の「せいくらべ」(5月5日)があります。

「ほら、O△ちゃん、せいくらべだよ。やってごらん！」

そう言って子供の背中を押すおとうさん、おかあさんの顔にこそ、「...本当は俺(私)がやってもらいたいのに...なつかしいなあ」って書いてあるんです。





星空への誘い①

君にも見える 宇宙への入口

馬場 弘修

遙かなる無限の大宇宙。夜空で瞬く星の美しさは大昔から人々の心を引き付けてきました。星の名前や星座を知らなくても、その美しさに変わりはありませんが、「星ってきれいだな」という思いさえあれば、星空は私たちにたくさんのことを教えてくれます。ただ眺めるだけから、ほんの一步踏みだして夜空を見上げる楽しさを広げてみませんか？

1 星はそれぞれ明るさに違いがあり、その明るさごとにグループ分けがされています。町明かりや空気の汚れが全く無い理想的な条件の下で、肉眼で見ることができ一番暗い星を6等星、一番明るい星を1等星と呼び、その間を5等分したものが星の等級です。1等星と6等星を比べると明るさが100倍違うので、1等級の違いは約2.5倍となります。町の中では家の明かりや看板のネオンサイン、街灯や車のヘッドライトなどに、空気の汚れも加わり暗い星がかき消されてしまいます。季節によって違いはありますが、府中で見ることができるのは3等星くらいまででしょう。

星の明るさの違いは夜空を見上げただけでも気付きますが、さらに詳しく観察すると、星には色が付いていることがわかるでしょう。太陽のように自ら光り輝く恒星の色の

違いは、その表面温度によるものです。温度が低ければ赤く、高くなるにつれオレンジ色から黄色、白から青白い色となります。夏の星座さそり座の1等星アンタレスは、赤っぽい色を放つ星として知られています。黒い画用紙に色鉛筆やクレパスなどで、いろいろな星の色を表現してみるのも楽しいでしょう。

2 まちまちの明るさと色で無秩序に並ぶ星々の名前などを覚えるにはどうしたら良いのでしょうか。まず、実際に星空を見上げながら星図や星座早見盤（普通は惑星の位置表示がありませんので注意が必要です）を使って、その季節に見ることができ1等星を見つけましょう。星図に暗い星まで表示されていると、かえって見当が付けにくいので、肉眼での観察では3等星まであれば十分でしょう。町の中で3等星までの代表的な星の並びを覚え、それを元にすれば周りにある星座が簡単に見つけられるはずです。さらに、星座にまつわるギリシア神話や星の名前の由来を調べておくと、大昔の人々の考え方や知恵に触れることもできるでしょう。

最初から全ての星座や星の並びを覚えることはできません。あまり欲張らずに、実際に見ることが

できる季節の星座から覚えるようにしましょう。

3 肉眼では星座の形をたどるだけで精一杯・・・、それだけではつまらないと思うかもしれません。そんな時は満天の星空を見られる場所に出かけてみましょう。そこには、たくさんの楽しみが私たちを待っています。夏に多く現われる流星を見るには肉眼が一番適しているでしょう。たくさんの流星を見つけるには、広い範囲をボーッと眺めることが大切なのです。

また、夏の夜空を南北に横切る天の川も美しく見ることができます。天の川は私たちの銀河系（約2千億個の星が、直径約10万光年の円盤状に渦を巻いている）を内側から見た姿なのです。秋の星座アンドロメダ座にあるM31という天体は、私たちの銀河系の隣にある銀河ですが、地球から230万光年（光のスピードでも行き着くのに230万年かかる）もの距離があります。そんな遠くにあるものが、山奥などでは肉眼で見ることができのです（小さな楕円形の煙状ですが）。このように、肉眼だけでも十分に宇宙の大きさを感ずることもできるのです。

みなさんも最初は気負わずに、天文「学」ではなく天文「楽」のつもりで星空を見上げてはいかがでしょう。

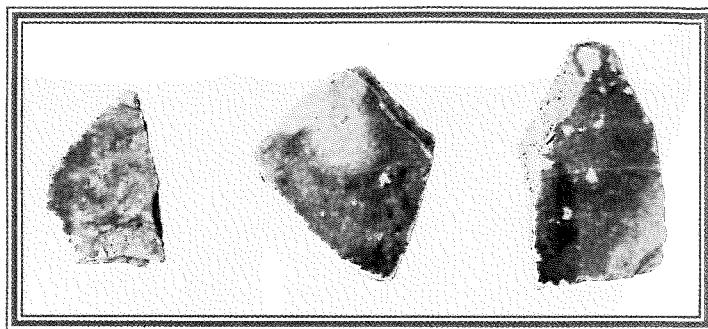
最近の発掘調査

奈良三彩の小壺

石阪ハイツ地区から

府中市遺跡調査会

蔵持 大輔



今回出土した三彩小壺の破片

前号で紹介した白磁は、唐（中国）から輸入されたものでしたが、今回紹介する資料は、白磁と同じ中国唐代に作られた唐三彩の影響を受けて、日本で生産された奈良三彩です。

奈良三彩が出土した場所は、美好町3丁目のマンション建設予定地で、JR南武線・京王線分倍河原駅の北東約250メートルに位置しています。発掘調査は1995年に行われ、最近になって出土品の整理作業を始めたところ、3つの小さな破片が見つかったのです。府中市内ではすでに三彩と二彩の小壺が1点ずつ出土していましたが、3例目の発見です。

今回の出土品は、上のモノクロ写真ではわかりにくいと思いますが、緑色・淡緑灰色・褐色の3色が鮮やかに残った、正真正銘の三彩です。その形は、高さ4センチメートルほどの小さな壺（小壺）に復元でき、口縁から肩部にかけてと胴部の破片であることがわかりました。発掘現場で遺物を入れた袋のラベルを見ると、竪穴住居跡の埋め土の上の方から出土していることが記録されていました。したがって、この竪穴住居に住んでいた人が奈良三彩を所有していたのではなく、住居が廃棄された後に捨てられたものと判断できます。

さて、奈良三彩は常時生産されたものではなく、必要に応じて国家の直営工房で生産されていたと考えられています。また、平城京での出土状況から、一部特定の人々の私的所有物で、祭事用の器（儀式器）としての機能の他に権威の表象としての機能もあることが指摘されています。このように大変貴重な奈良三彩が府中で出土したのは、武蔵国の中心である国府があったからだといえるでしょう。ちなみに東京都内では、多摩市の「多摩ニュータウンNO.264遺跡」出土の三彩鉢と、調布市の「上石原遺跡」出土の二彩多口瓶（2点）しか発見されていません。奈良三彩がいかに貴重であったかわかると思います。

ところで、武蔵国府においても奈良三彩は、その希少性から国司などの高級官人の所有物だったと考えてよいでしょう。国府の中心施設にあたる国庁は大国魂神社東側一帯の京所地区に所在していた事が発掘調査で明らかになってきました。当然、国司などの高級官人は、国庁の近辺に館を構え住んでいたと思われます。しかし、今までに見つかった奈良三彩は、いずれも国庁推定地から1メートル以上も離れた、国庁を取り巻く集落（国府集落）の周縁部から見つかっています。しかも、いずれも竪穴住居から出土しています。高級な奈良三彩が、なぜこのような国府集落の端の方から出土したのか理解に苦しみます。国府で働く下級役人が国司から賜ったものなのでしょうか。今後の調査で、奈良三彩の出土例が増えるのを期待しつつ、改めて奈良三彩の持つ意味合いを考えていきたいと思っています。



奈良三彩

奈良三彩とは、緑釉と褐色釉と透明釉、あるいは緑釉と透明釉をかけた陶器のこと。中国唐代の唐三彩に倣って奈良時代に製作されました。その出土数は非常に少なく、托（たく）・火舎（かし）・香炉（こうろ）・多口瓶（たこうへい）と呼ばれる仏器類が多いため、儀式用具としての性格が強いものと考えられています。出土遺跡は宮都・国府などの役所・寺院・祭祀遺跡にほぼ限定され、普通の集落遺跡から出土することはほとんどありません。また、奈良の正倉院には伝世品がありません。

■平成8年度

寄贈資料一覧

	寄贈者	資料名	分類	数量
1	市川 進三	うなぎ搔き ドウ 鍬	民俗	8
2	市川 博	まぶし編み機	民俗	1
3	横山 節	結束刈機	民俗	1
4	小牧 貞男	万石どおし つづら 座繰り 糸車	民俗	4
5	松村 昭	箏笛 子供服	民俗	3
6	小川 健司	灯火管制の電球	民俗	2
7	小倉 松男	室内張物器	民俗	1
8	石坂 元一	大釜 せいろ 味噌樽 他	民俗	7
9	戸塚 昇	千歯抜き 種まき機 フリマンガ 他	民俗	7
10	鴨下 長治	軍退役記念の盆 鏡 こね鉢 他	民俗	12
11	鴨下 長治	北多摩郡役所関係資料	歴史	11
12	川崎 昌美	川崎昌美家文書	歴史	341
13	柴田 晃	通信簿 卒業証書 奉公袋 他	教育	44

■平成8年度

利用状況

(H8.4.1～H9.3.31)

開園日数326日

区 分		有 料		減 免	合 計
		一般	団体		
入園者	大 人	172,813	10,331	15,356	198,500
	子 供	38,044	19,348	2,822	60,214
	小 計	210,857	29,679	18,178	258,714
博物館 入館者	大 人	19,148	4,886	5,277	29,311
	子 供	6,198	10,824	308	17,330
	小 計	25,346	15,710	5,585	46,641
プラネタリ ウム観覧者	大 人	42,605	3,080	2,264	47,949
	子 供	22,207	15,250	1,777	39,234
	小 計	64,812	18,330	4,041	87,183
合 計		301,015	63,719	27,804	392,538

減免：身障者等

郷土の森の新刊紹介

— INFORMATION —

■府中市郷土の森紀要 第10号 ¥1,200

- ・府中市に生息する注目すべき4種類のクモについて
 - ・府中市西蔵院所蔵近世埋経資料をめくって
 - ・内藤新田欠差覚書
 - ・古代「武蔵野」の展開—国府の周縁—
 - ・後北条氏領国への唐船来航と小田原唐人町形成の背景について
- 以上論考5編を掲載

■府中市郷土の森年報 第10号(平成7年度版) ¥600

■特別展「江戸の粋—柄鏡—」 ¥1,000

昨年度10月、市内在住、大室政右氏の古鏡コレクションから200余点を紹介した展示会図録。あわせて、大国魂神社伝来の古鏡も掲載。

■特別展「銀河鉄道の夜—それぞれの心象スケッチ—」 ¥1,000

昨年度夏、宮澤賢治生誕100年を記念して、長編童話「銀河鉄道の夜」を視覚的に表現した、絵本作家による原画などで綴った展示会図録。

郷土の森のリサイクル

馬場 治子

江戸時代の暮らしが資源の再利用にたけていた、今流に言えばリサイクルの徹底していた社会だったとはよく言われることです。太陽熱や水という自然エネルギーの大きな循環と、人間の手を経る様々な小サイクルの大小の輪が綿密にかみ合った上に暮らしがありました。

特に植物の利用に関してはよくまあここまでと思う程です。例えば稲。実は米として食料になるのは勿論ですが、藁の利用と来たら編笠・草鞋などの生活必需品から始まって、藁屋根の下に住み、さすがに人間は食べないものの家畜の飼料にはすき込んでやり、と、衣食住のあらゆる面で使われていました。藁製品が古くなればそのまま或いは灰にして田圃の肥料に、動物のお腹を通ったものも当然肥料になって、その田圃からはまた次の年稲が育つ、というサイクルです。

また“灰芥”などと言われ、それこそ灰になって地面に還ると思いきや、江戸時代には貴重なアルカリ物質だった灰も、肥料のみならず染め物の媒染、酒麴の発酵剤にも、酸化した酒を中和する為にも、製紙にも生糸から練絹にする精練の時にも、その他色々利用されたのです。自分たちでは灰を利用できない大都市の住人の竈から灰を買い集めるリサイクル業者が立派に商売を成立させていました。結局こういうシステムはいかに人間の生活が様々な分野の有機的な結びつきの上に成立っていたかという事でしょう。

ところで郷土の森ですが、園内の田圃で“こめっこクラブ”の子供達が育てた稲の

藁は、ふるさと体験館で時折開催されるワラ細工実演の材料になっています。これくらいは来園される皆さんもすぐ気がつくられるでしょうが、灰の利用もしている事にはちょっと驚かれるかも知れません。

植物灰利用の大きな分野に製陶があります。灰の成分である珪酸質、石灰質、磷酸質等の混合は融けてガラスになり焼物の釉になります。窯の中で燃料のマキの灰が焼物に融け付いたのが釉の始まりだとされますが、それに他の物質を混ぜるなど調整し、美しい皮膜にしていたのが灰釉と呼ばれる東洋陶磁を代表する釉です。

郷土の森陶芸教室は人気講座の一つですが、ここ数年来のテーマはオリジナルの釉をかけた作品作りです。藁灰釉に続き梅灰釉作りが毎年の仕事になってきました。

梅園は郷土の森の大事な一面です。早春の観梅、初夏の梅の実利用に次いで、冬季に出る間伐材の変身です。何しろ1300本もある量です。植木屋さんをお願いして処分するしかなかった物を全部ではないながら内部利用するようになりました。郷土の森オリジナル陶器の素です。何年かの内には市民の陶芸好きの方達の協力を得て作品がたくさん出来るようになったらいいなと夢見ています。

それはともかく、枝燃しから始まるこの教室は“粘土をこねる事が陶芸”という心算で参加された受講生にとって予想外ではあるものの、一つの物作り(産業)が他の分野とどう結びついているのか、現代はその事がいかに見えにくくなっているか等に改めて気づききっかけにもなっています。

かつての人々の暮らしの色々な要素とそれらの結びつきを丸ごと分かつとするのは大変難しいことかも知れません。でもそういうことが身近に分かる博物館があったら素晴らしいと思いませんか。

これからも郷土の森の持つたくさんの要素を有機的に結び合わせていけば、単に廃品利用に終わらないここ独自の大小のサイクルが形作られ、暮らしの全体像が見える可能性が生まれます。郷土の森って、そんな博物館なのです。

▶これでも陶芸教室ですー灰作り

